

まぢの 営み

風土に根ざした

各地の気候風土や地域特性を生かした暮らし方・住まい方にこそ低炭素都市への「解」があるのではないかと、人々の営みが息づく、関西各地の特色あるまち並みや暮らしぶり、実験的な取り組みなどを追うことで、サステイナブルな都市の輪郭を探ってみた。



通りを挟んで右は築百年の古民家を生かしたヘアサロン、左はレトロモダンなメイクブラシのセレクトショップ(大阪・中崎町)

新しいまち、新しい家、新しい庭。
土に触れる暮らしを始める



小舟木

村

持続可能な社会システムづくりの第一歩

環境と地域社会との共生

琵琶湖東岸に開けた商業と水郷の景観都市・近江八幡市の旧市街の西南、周囲を豊かな農地や河川に囲まれた一角に、二〇〇八年、環境と地域社会との共生を目指す「小舟木エコ村」がオープンした。各戸とも、ゆつたりとした敷地に果樹が植えられ、十坪の菜園が備わり、ごみ用コンポストや雨水タンクも設置されている。〇九年四月末現在、八十世帯ほどが入居するが、その九割以上はオール電化。また、宅地の南側には小舟木エコ村関係者や周辺住民の耕す畑地が広がり、そこで収穫された野菜類は小舟木エコ村内で販売されている。

このエコ村構想はどのようにして生まれたのか。
滋賀県立大学副学長でNPO法人エコ村ネットワークキング理事長の仁連孝昭さんによれば、地球温暖化や水問題などで危機に瀕している「環境」に負荷をかけず、グローバル経済の進行と東京一極集中で破たん寸前の「地域経済」に活力を与え、人と人、人と社会とのつながりが崩れる一方の「地域社会」を立て直す手がかかりとなる、持続可能な社会システムのモデルを「口で言うだけでなく」実際に滋賀県でつくるために、二〇〇〇年、大学や経済界、市民や行政関係者が議論するなかで具体的に立ち上がった。

二年後、最初の候補地が近江八幡市の現在地に決まり、

「エコ村憲章」を制定。また、内閣官房都市再生本部「環境共生まちづくり事業」に選定された。

宅地完成は 七年から始まった。エコ村事業法人・株式会社地球の芽の田中孝佳さんによれば、同社担当の区画では、「カーボン・オフセット」といってしくみを利用して、造成工事に伴ってCO₂を実質ゼロにしているという。各家庭で実践されている雨水タンクやコンポストの活用、農薬を使わない菜園や果樹栽培も、いかに環境への負荷を減らすか、という取り組みの一環だ。現在、小舟木エコ村住民と研究機関が協力した「カーシェアリング」の導入を検討している。



自作のエコ村構想の模型を前に、小舟木エコ村への思いを語る仁連孝昭さん

琵琶湖畔各地でのモデルづくりへ

では、「地域経済」「地域社会」との関わりについてはどうか。仁連さんは、「近江八幡の周りには農地が多いのですが、ほとんどが兼業農家でサラリーを注ぎ込んで農業を維持している。そこで小舟木エコ村の住人と周辺の農家が農産物を通じてコミュニケーションでき、地域経済を安定させるしくみをつくりたかった」と言う。例えば、各戸の敷地に菜園を設けるのも、住人が作物を育てることで身をもって農業を見直してほしいから。「エコ村にとって大切なのは個々のハードよりもソフト。住人

木の家に住みたくて小舟木エコ村に移住した小島澄子さん
菜園づくりを始めて自然のすこさを実感したという川合紀之さん・恭子さん夫妻
息子家族と孫家族、大家族で移住し二世帯分の菜園づくりを手がける大橋美智子さん



小舟木エコ村の南には、同村関係者や周辺住民が耕す畑地「百菜劇場」が広がる

は国産のムク材。断熱を工夫し、深夜電力を活用した蓄熱式電気暖房器で冬も家中どこでも二十四時間ポカポカ」と言う。近江八幡市内の農家で、同居する息子さん家族、孫娘さん家族と二軒一緒に越してきた大橋美智子さんは、二軒分の菜園づくりを楽しみ、「今、人生、最高の幸せです」と笑う。

もちろん、仁連さんたちが目指した当初のエコ村構想がすべて小舟木エコ村で実現できたわけではない。重要なのは、新たな社会システムのモデルとなる「コミュニティ」を、琵琶湖周辺のおちこちで、それぞれの環境や条件に合わせながらつくっていくこと。「別の場所では全く違うエコ村ができると思います。そんなモデルが幾つもできてくると、私たちが目指しているものが理解され、受け入れられていくに違いありません」。琵琶湖畔に芽吹いたエコ村構想の今後に注目していきたい。

がどんな考え、生き方で暮らしていくか」。さいわい、エコ村構想に共感した入居者ばかりなので、みんなが主体的に環境と地域社会と共生する暮らしをつくっていくという、「自考自築」の基盤ができた、と仁連さん。

実際の暮らしぶりをみると、近江八幡駅前の賃貸から移り住んだ川合紀之さん・恭子さん夫妻は、自宅を建築している最中から菜園づくりに熱中。「今まで何とも思わなかったけど、雨が降ることがすごく大事やな」「ダイコンを植えた途端、モンシロチョウが卵を産もうと寄ってきて、すごいな」と実感。大津市から家族四人で入居した小島澄子さんは、「木の家に住みたくて、内装



小舟木エコ村は、約15haの土地に、戸建て木造住宅約370戸を建設、1000人ほどが暮らすまちになる

若者たちが都心近くに残る長屋を改装して店を営み、まちの活性化につなげている「中崎町」、山間の商業のまちを支える重厚な古民家の家並みの良さを生かしたまちおこしに取り組む「宇陀」、「秘境」から、「芸術村」への道を拓く「龍神村」、近江八幡の地域と環境との共生を目指す「エコ村」。地域の風土に根ざし、人と環境への負荷をかけないまちづくり、暮らしづくりへの取り組みの積み重ねこそが、関西における「持続可能な社会」実現への一里塚となっていくだろう。

取材・撮影／伊田彰成 編集／田窪由美子